



藍、再び

～時を結ぶ藍の魅力～

落合小学校の授業で綿から紡がれた糸を天然灰汁発酵建てで染める。
ふるさと教育の貴重な素材。ふるさと文化伝承館。

東京オリンピックパラリンピックの公式エンブレムとなった「組市松紋」には、日本の伝統色藍色が使われています。明治時代、英国人化学者に「ジャパンブルー」と呼ばれた藍色は、着物、野良着、足袋、手ぬぐいなど、日本人の暮らしに溶け込んでいました。



タデアイ

藍染ができてあがるまでには数多くの工程があり、たくさんの方の手と時間を要します。また、タデアイという植物を育てて夏に収穫し、その葉を乾燥させて細かく砕きます。秋になったら蔵に砕いた葉を山のようになり、積み上げ、水をかけ、繰り返しかき混ぜながら約3ヶ月間発酵させます。すると、12月頃に「すくも」と呼ばれる藍染の原料ができます。このすくもを作る家は「藍屋」と呼ばれました。藍屋はすくもを運びやすいように玉状に固めて「藍玉」とし、各集落の「紺屋

(染物屋)へ出荷しました。紺屋はすくもに灰汁やふすまを混ぜて染(かめ)の中で発酵させ、緑がかったやわらかな青色である発覗きから濃紺までさまざまな青色を染め出したのです。

江戸時代後期から明治時代にかけて、山梨県でも藍の栽培が盛んでした。明治18年の県内藍葉生産量は中巨摩郡が六万六千四百五十五貫と県下最大で、その中心地が南アルプス市の旧落合村でした。隣の旧川上村で藍屋を営んでいた浅野家は、市域だけでなく国中各地から藍葉を集め、村人総出ですくもを作り、藍玉にして現在の北杜市や富士川町、山梨市、甲州市、笛吹市など国中中の紺屋に広く販売していました。このように、南アルプス市は県内藍産業の拠点だったのです。

日本の藍産業は明治中頃最盛期を迎えますが、やがて安いインド産藍の輸入が増加し、明治30年代には西欧で製品化された人工藍の輸入によって急速に衰退します。大正時代に入ると多

くの藍屋、紺屋が姿を消していきました。中巨摩郡での藍栽培も次第に縮小し、浅野家も明治40年(1907)頃には藍屋を廃業せざるを得ませんでした。2代目の長右衛門は、明治23年3月に旧武川村の紺屋仲間と美相寺神代桜での花見の様子を歌にしており、晩年の大正9年、在りし日のすくも作りを偲ぶかのように、歌を石碑に刻み、神代桜のたもとに残しました。

2015年4月、長右衛門の歌に誘われたかのように北杜市で育てられた藍の苗が手に入り、ささやかながらふるさと文化伝承館で育て始めました。その藍から種をとり、翌年、藍屋の子孫である浅野修二さんの果樹畑の一角でも藍の栽培が始まりました。

すくも収穫にこぎつけました。秋には浅野さんの藍葉と伝承館の藍葉を合わせ、初めてすくもを作ることに成功しました。そして今年の冬、そ



すくも収穫にこぎつけました。秋には浅野さんの藍葉と伝承館の藍葉を合わせ、初めてすくもを作ることに成功しました。そして今年の冬、そ



のすくもに果樹の剪定材の灰から作った灰汁を加え、浅野家に残された藍葉をお借りし、その中で発酵させたところ、桜咲く4月、ついに本藍建て染めに成功したのでした。この藍染液で井上染物店さんに染めていただいたのが、伝承館の暖簾です。藍葉生産とすくも作りが途絶えて約110年ぶりの「南アルプスブルー」です。

現在、「ジャパンブルー」の魅力が見直され、染物の他、食品や化粧品、アクセサリーなどさまざまな分野に藍が応用されています。世界が注目する「ジャパンブルー」の可能性は、私たちのすぐそばにもあるのです。

文／写真 文化財課